教育実践研究　第34集（2024）139－144

［外国語］

中学校英語における効果的なライティング能力の育成

－目的・場面・状況を明確にした６つの手立て－

北川　智也*

1　主題設定の理由

「中学校学習指導要領解説外国語編」によれば，グローバル化が急速に進展する中で，生涯にわたる様々な場面で外国語によるコミュニケーション能力が必要とされることが想定される（文部科学省，2017）。外国語の言語活動には，「聞くこと」，「読むこと」，「話すこと」，「書くこと」の４技能が関わっているが，そのうち「話すこと」においては，「やりとり」と「発表」に分けられ，４技能５領域の指導が求められるようになった。この主旨を生かすべく，日々の授業の中でSmall talk やプレゼンテーション，ディスカッションを行う場面が増えた。

著者自身，外国語を用いて自分の意見を伝えたり，相手の意見を聞いたりするコミュニケーション活動を授業の中で多く取り入れてきた。その結果，生徒が「話すこと」や「聞くこと」の育成を図ることができるようになってきたと考える。しかし一方で，2009年Benesse教育研究開発センターが行った，「英語学習でつまずきやすいポイント」を問う調査では，「文法が難しい」「英語のテストで思うような点数がとれない」「英語の文を書くのが難しい」と感じている割合がいずれも７割以上であった。また，2018年同センターが行った，「中３生の英語学習に関する調査〈2015－2018継続調査〉」では，「自分の気持ちや考えについて英語で書くのが楽しい」という項目では，肯定的回答が41.6％と低い結果となっている。

このような背景には，小学校での外国語活動の導入も含め，「話す」活動を重視したコミュニケーション活動と「書く」活動を効果的につなげられていなかったことが大きな要因であると分析される。「話すこと」では，英語は楽しいと感じていた児童が，「書くこと」によって英語は難しいものと感じているのではないかと考える。文字の書き起こしに困難を抱える生徒が多いと思われる。安田（2010）によると，「ライティングは，自分の考えなどを的確に英語で表現できるよう指導をすることにより，本来の英語で『書いて表現する』活動の構成になっている。このことをフルに活用して，コミュニケーション能力の育成を図る」ことが肝要とされている。

４技能の指導・統合を目指す英語教育の中，「書くこと」の指導に使うことができる時間は限られているため，短時間でできる活動の積み重ねにより効果的に生徒のライティング能力を高めることが重要である。中学校学習指導要領では「書くこと」の目標が以下のように示されている。

ア	関心のある事柄について，簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。
イ	日常的な話題について，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。
ウ	社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて，考えたことや感じたこと，その理由などを，簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

これらを踏まえ，英語の書く際の目的・場面・状況に応じて，簡単な語句や文を用いて正確に書くこと，まとまりのある文章を書くこと，考えたことや感じたことを理由とともに書くことを目標とした授業づくりを目指すことにした。

2　研究仮説

「中学校学習指導要領解説」によれば，「書くこと」が苦手な生徒には何をどのように書けばよいかを指導する必要がある。その手立ての例として，自分の考えや気持ちをペアやグループで簡単な語句や文を用いて口頭で伝える活動を

*十日町市立下条中学校

した後に，その内容を書いてまとめることが挙げられる。また，日常的な話題としては，具体的で関心が高く，想起しやすいものを主に設定することが有効であるという。

このことから，身近な題材を用いながら，「話すこと」から「書くこと」に向かう活動を多く取り入れることで，生徒の「書く力」を高めることができると考えた。

仮説１：身近な題材を用いることで，生徒の書く力を高めることができるのではないか。 仮説２：「話すこと」から「書くこと」という活動を行い，生徒の「書く力」を高めることができるのではないか。

以上の仮説をもとに，本実践では身近な題材について話したり書いたりする短時間活動を繰り返すとともに，より正確に書けるようになるためのドリル学習や，まとまりのある文章を書けるようになるための単元プロジェクトを継続的に実施することにした。

3　指導の実際と考察

(1) ゲーム活動

毎授業の開始時，ウォーミングアップとして，１分×３回のサイコロゲームを毎時間行った。一問一答タイプの英語でのやりとりである。相手を交代しながら図１に示されている英語を全問答える活動も行った。最初は戸惑っていた生徒も，繰り返し活動していくうちに，正しく英語で答えることができるようになっていった。また，余裕が出てきた生徒は，自分が感じたことや理由などを付けたした答えを英語で話すことができるようになった。

新出文法導入時，話す活動を行った後に，図２に示すような，話したことを書く活動を取り入れた。話したことを文字にすることは難しい生徒もいたが，教師がヒントやアドバイスをすることで，多くの生徒が書くことができるようになっていった。

上記の活動は，相手から英語で質問される時，具体的な場面を意識しながら活動に取り組むことにした。

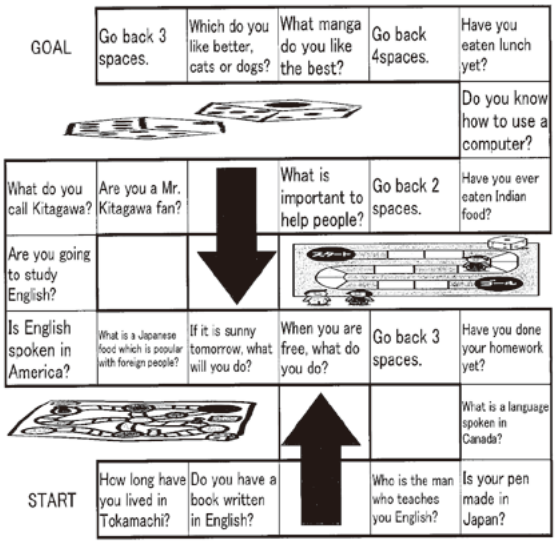


図１．サイコロゲームのワークシート

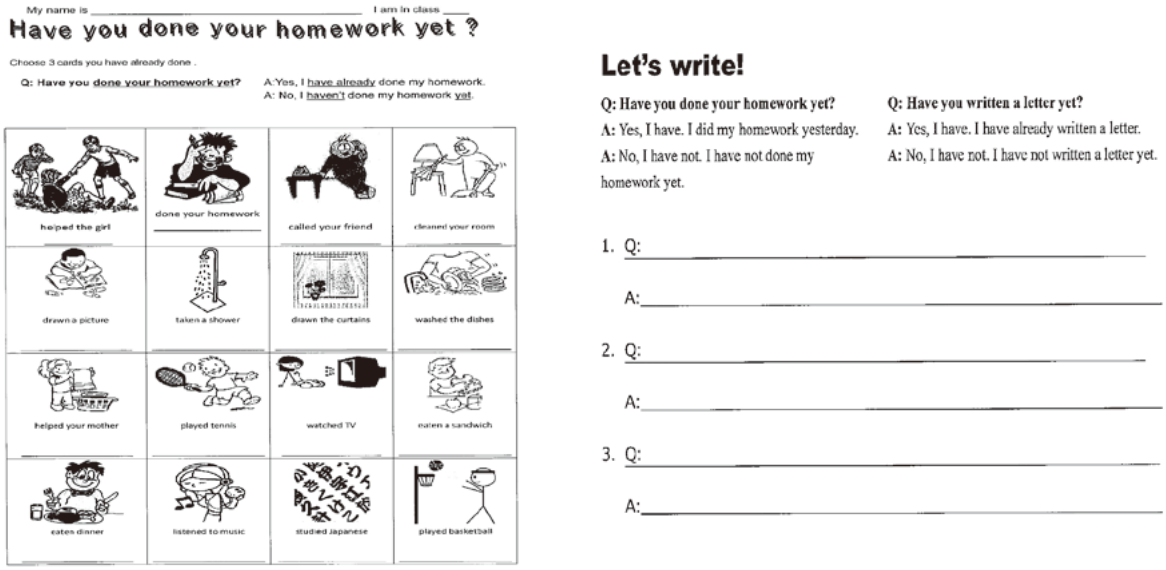


図２．新出文法時でのワークシート

(2) ドリル学習の継続

新しい文法を導入し，活動等を行った後，並び替え問題や空所補充の問題を繰り返し行った。活動を意欲的に行ってほしいというねらいから，授業の終わり５分間を文法問題を解く時間に充てた。このことで，単元テストや定期テストにおいて，並び替え問題や空所補充の問題を確実に解くことができるようになり，文法の定着を図ることができた。この活動は，言語の使用場面や言語の働きを意識し，正しい英文を書くことができることを目的にしたものである。

(3) 帯活動

第三者を紹介するペアによる帯活動を行った。興味をもって活動に取り組んでほしいという願いから，選ぶ人物は生徒が親しみのある人物やキャラクターを選んだ。まず，与えられた情報（図３）を見て，相手に英語で伝える活動を行った。相手に伝える際，アイコンタクトや大きな声で伝えることを確認した。その後，相手に伝えた内容を，英語で書く活動を行った。最初は，話すことはできるが書くことが難しい生徒が多かったが，繰り返し行っていくうちに，抵抗なく書くことができる生徒が増えていった。

この活動は，日常的な話題について，簡単な語句や文を用いながら，基本的な情報などを説明するまとまりのある文章を書くことを目的に行ったものである。

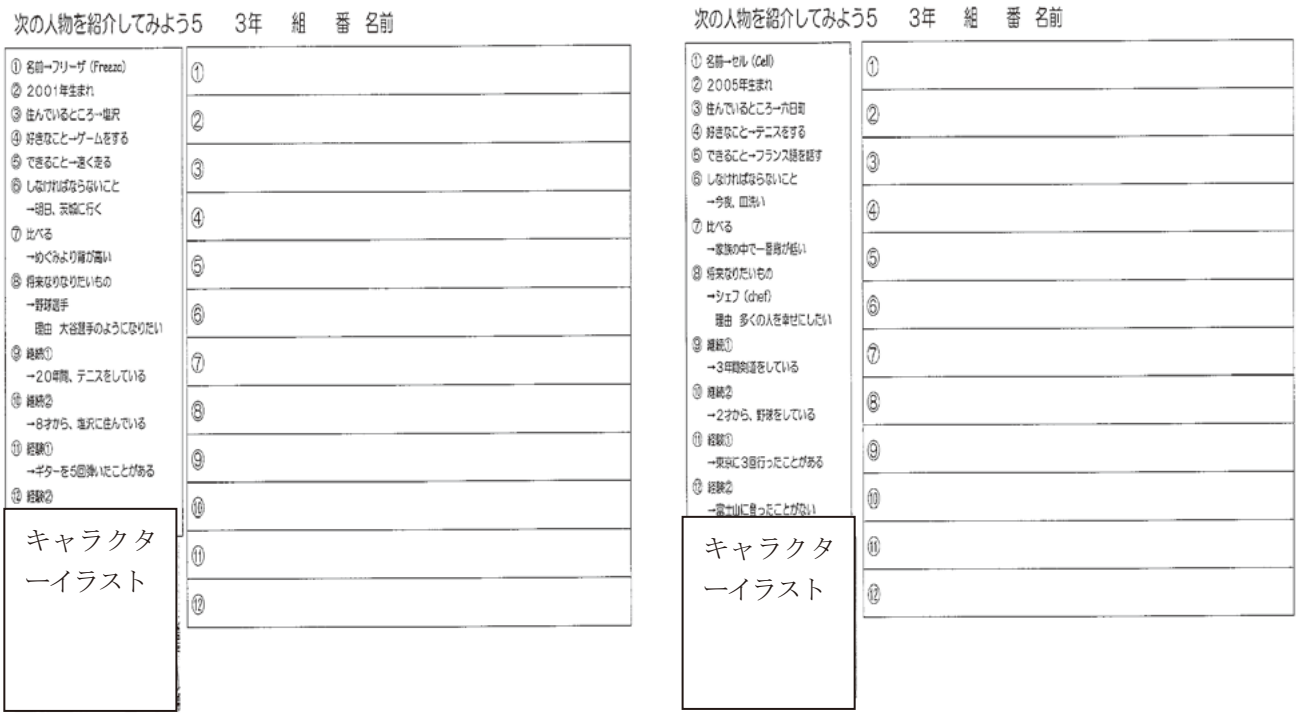


図３．帯活動でのワークシート

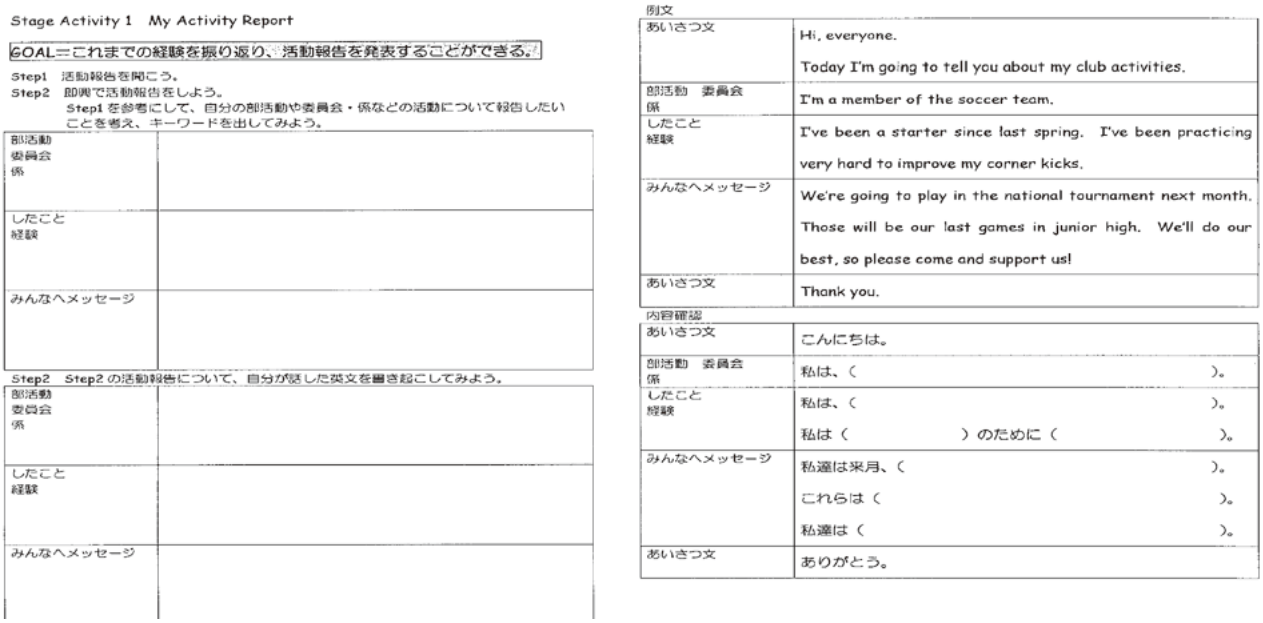
(4) 身近な話題についての活動（話す→書く）

What sports do you like? Why?やWhich is more interesting for you, baseball or soccer? Why?などのように，具体的で関心が高く，想起しやすいものを主に設定し，身近な話題で英語で話し，書くという活動を行った。繰り返し行うことで，話したり書いたりできるようになってきた。英語が得意な生徒は，I like baseball because I am Ohtani fan. I am in the baseball club. I practice it hard every day.など，理由やエピソードなどをさらに肉付けした英語を話したり書いたりすることができるようになった。また，場面を変えて繰り返した結果，似たような題材でもすらすらと活動ができる生徒が増えていった。

(5) 各単元プロジェクト（stage activity）

東京書籍が発行する「NEW HORIZON」を使い授業を行っている。この教科書は，Stageごとに各Unitが構成されており，各ステージにはStage Activityというまとめ学習がある。著者は，このstage Activityにつながるために，（1）～（4）を確実に行った上で，各Stage Activityに取り組んだ。

例えば，３年Stage Activity 1では，「My Activity Report」これまでの経験を振り返り活動報告をするという題材がある。まずモデル文を提示し，相手に伝えることをイメージさせた。次に，キーワードを用いて，相手に何を伝えるかを考えさせた。最初は，どのように表現してよいか分からない場面があったため，英語でキーワードにまとめたことを相手に話す活動を取り入れた（図４）。ペアやグループ活動を取り入れ，どのように言ってよいか分からなかった場面を中心に聞き，整理をした。一通り話す活動が終わった後に，相手に伝えたことを書く活動を行った。その際，マインドマップを用いて考えを整理したり，既習事項を整理しながら活動した。話す活動時にペアやグループ活動を取り入れたことで，すらすらと書き起こすことができる生徒が増えた。



Stage Activity 1　My Activity Report

GOAL＝これまでの経験を振り返り、活動報告を発表することができる。

Step1　活動報告を聞こう。
Step2　即興で活動報告をしよう。
Step1 を参考にして、自分の部活動や委員会・係などの活動について報告したいことを考え、キーワードを出してみよう。

部活動 委員会 係	
したこと 経験	
みんなへメッセージ	

Step2　Step2 の活動報告について、自分が話した英文を書き起こしてみよう。

部活動 委員会 係	
したこと 経験	
みんなへメッセージ	

例文

あいさつ文	Hi, everyone. Today I'm going to tell you about my club activities.
部活動　委員会 係	I'm a member of the soccer team.
したこと 経験	I've been a starter since last spring. I've been practicing very hard to improve my corner kicks.
みんなへメッセージ	We're going to play in the national tournament next month. Those will be our last games in junior high. We'll do our best, so please come and support us!
あいさつ文	Thank you.

内容確認

あいさつ文	こんにちは。
部活動　委員会 係	私は、（　　）。
したこと 経験	私は、（　　）。 私は（　　）のために（　　）。
みんなへメッセージ	私達は来月、（　　）。 これらは（　　）。 私達は（　　）。
あいさつ文	ありがとう。

図４．Stage Activityでのワークシート

(6) ICTの活用

授業の多くをパワーポイントやデジタル教科書等のICT機器を用いて授業を行った。著者自身ICTにあまり詳しくなかったが，同僚から指導を受け，ICT機器を使っていくうちにスムーズに授業を行うことができるようになってきた。

新出文法・新出単語提示時には，イラストと文字をイメージさせながらICT機器を活用した（図５）。回数を重ねていくうちに，すらすらと英語を話すことができるようになった。イラストと文字を繰り返しICT機器を用いて見せる言うことで，文字を「書くこと」が連想することができるようになったと考える。

板書だけでなく，ICT機器を用いることで，生徒が何もしない空白の時間がなくなり，Free Riderもいなくなった。その時間に何をしなければならないか生徒自身が分かることと，活動の時間を確保することで各自が目的をもって活動に取り組むことができるようになった。特に英語を書く時間を確保することができたことから，ICTの活用は，英語を書く活動に効果的であったと考える。

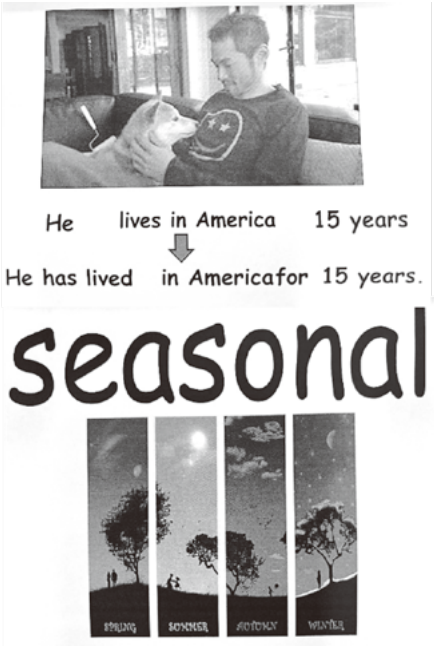


図５．ICT使用時のスライド

4　結果

(1) 教研式標準学力検査（NRT）

本実践は，中学２年生23名を対象に，令和４年４月から令和５年３月まで実施した。その実践の効果を確認するために，指導前（２年生時の４月）と指導後（３年生時の４月）に実施したNRTの結果を比較する。なお，NRTは全国の学力水準と比較して生徒の学力を相対的に把握する検査である。

① 学年の概要（評定は「５」が最上位）

	NRT偏差値平均	標準偏差	受検者数	評定５	評定４	評定３	評定２	評定１
２年生時	５０．３	１１．４	２４人	２人	７人	７人	７人	２人
３年生時	５２．８	９．０	２３人	２人	８人	８人	５人	０人

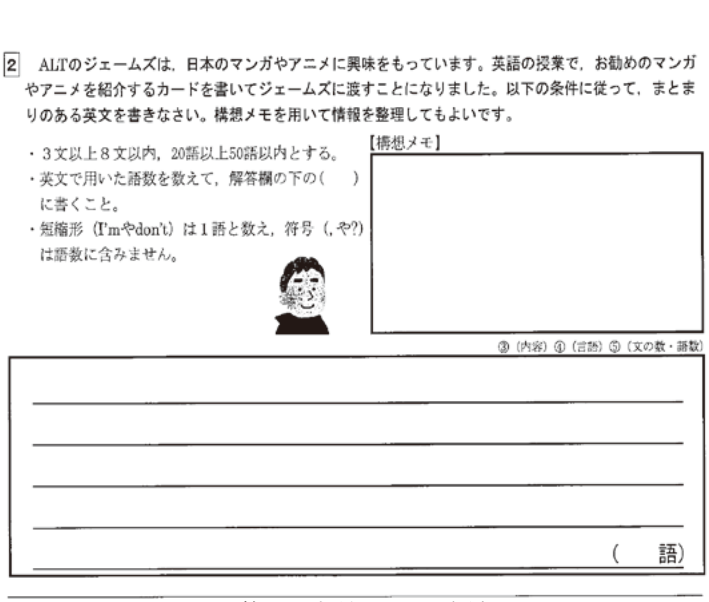
② 大領域別集計（全国比を１００とする）

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
２年生時	１００	１０３	９９	１００
３年生時	１００	１０６	１１３	１１４

１年間の指導によりNRT偏差値平均が2.5ポイント上昇し，特に「書くこと」のスコアが顕著に上昇した。なお，中領域別集計では，「適切な表現を用いて英語を書く」のスコア（全国平均を100とする）が大きく上昇し128となった。

(2) 新潟県Web診断問題（令和４年度　中学校３年生）

令和４年度実施の，新潟県Web診断問題（３年生）において，自校平均が県平均より約１ポイント高い結果となった。（１回目＝前年比1.3ポイント，２回目＝同0.8ポイント，３回目＝同0.7ポイント）計３回実施の診断問題では，「まとまりのある英文を書く」問題が出題されたが，日ごろ行っている活動が生きていたため正答率が約８割と非常に高い結果となった。（第１回＝図６，第２回＝図７）


2　ALTのジェームズは，日本のマンガやアニメに興味をもっています。英語の授業で，お勧めのマンガやアニメを紹介するカードを書いてジェームズに渡すことになりました。以下の条件に従って，まとまりのある英文を書きなさい。構想メモを用いて情報を整理してもよいです。

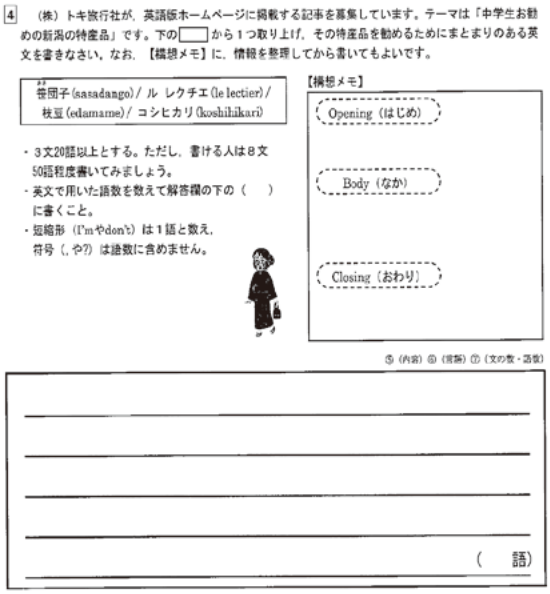
・３文以上８文以内，20語以上50語以内とする。
・英文で用いた語数を数えて，解答欄の下の（　　）に書くこと。
・短縮形（I'mやdon't）は１語と数え，符号（，や?）は語数に含みません。

【構想メモ】

③（内容）④（言語）⑤（文の数・語数）

（　　語）

図６．第１回新潟県Web診断問題


4　（株）トキ旅行社が，英語版ホームページに掲載する記事を募集しています。テーマは「中学生お勧めの新潟の特産品」です。下の□から１つ取り上げ，その特産品を勧めるためにまとまりのある英文を書きなさい。なお，【構想メモ】に，情報を整理してから書いてもよいです。

笹団子（sasadango）/ ル レクチエ（le lectier）/ 枝豆（edamame）/ コシヒカリ（koshihikari）

・３文20語以上とする。ただし，書ける人は８文50語程度書いてみましょう。
・英文で用いた語数を数えて解答欄の下の（　　）に書くこと。
・短縮形（I'mやdon't）は１語と数え，符号（，や?）は語数に含めません。

【構想メモ】
Opening（はじめ）
Body（なか）
Closing（おわり）

⑤（内容）⑥（言語）⑦（文の数・語数）

（　　語）

図７．第２回新潟県Web診断問題

(3) 生徒の振り返りシートから

以下は，授業後の生徒の振り返りシートの抜粋である。

・単元プロジェクトでは，ゲーム活動や帯活動を行っているおかげで，構成をスムーズに立てることができ，発表や英語を書くことがうまくできた。
・Web配信問題では，いつも練習している型なので，うまく解答することができた。
・毎回繰り返し行っているので，自然に英語の表現を言えたり書けたりすることができるようになった。
・授業で行ったことがテストでできたので，さらに英語を頑張ろうと思うようになった。
・英語で話したことを書くことが最初は難しかったが，自然とできるようになるとうれしくなった。

5　結論

(1) 仮説１「身近な題材を用いることで，生徒の書く力を高めることができるのではないか。」

生徒が興味を持つような話題や取り組みやすい話題で行ったことで，意欲的に活動することができた。そのため，英語を書く意欲が向上し，英語を書けるようになった。結果，仮説１は有効であったと考える。

(2) 仮説２「『話すこと』から『書くこと』という活動を行い，生徒の『書く力』を高めることができるのではないか。」

英語を話す活動を得意とする生徒は多かった。しかし，英語を書くとなると苦手な生徒が多い。英語で話したことを英語で書くという活動にしたところ，始めはうまくいかない生徒が多かったが，繰り返し行うことで徐々に書ける生徒が増えた。結果，仮説２は有効であったと考える。

(3) 仮説１，仮説２の活動は有効であったと考えるが，何よりも繰り返し行うことが効果的であったと考える。

しかし，英語が得意な生徒はマンネリ化し，活動に意欲的に取り組まなくなる可能性があるため，類題も適宜取り入れていくことが，全員で意欲的に取り組む鍵であると考える。

6　今後の課題

「書き手として主体的に考えたり，判断したりしながら理解したことを基に，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて適切に表現することが重要である」と，学習指導要領で謳われてる。したがって，「コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて適切に表現する」ということが次なる実践で望まれる。なぜそのように考えたのかという理由を考えさせる活動は多かったが，題材に対する感想や賛否など自分の考えについて書く指導について，工夫の余地があると感じた。今後は，これからの課題を意識しながら指導していきたい。

7　参考文献

Benesse（2009）．教育研究開発センター「第１回中学校英語に関する基本調査報告書（生徒調査）」
https://berd.benesse.jp/up_images/research/data_00_(3).pdf

Benesse（2018）．中３生の英語学習に関する調査〈2015-2018継続調査〉
https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=5368

安田 忠治（2010）．中・高等学校の英語教育における実践的なコミュニケーション能力の育成
https://www.blog.crn.or.jp/report/02/102.html

文部科学省（2017）.「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編」

東京書籍（2021）．NEW HORIZON English Course 3